

Léon de Rosny “Eléments de la Grammaire Japonaise (Language Vulgaire)” の一考察

A Study of “Eléments de la Grammaire Japonaise (Language Vulgaire)” by Léon de Rosny

宮原 温子
Atsuko MIYAHARA

Keywords : Léon de Rosny, “Eléments de la Grammaire Japonaise (Language vulgaire)”,
Courteous style, a verb classification

キーワード：ロニー、『日本語文典初歩（口語）』、丁寧体、動詞分類

1. はじめに

“Eléments de la Grammaire Japonaise (Language vulgaire)”¹⁾（以後、『日本語文典初歩（口語）』と記す）は1873年にフランス人日本語学者Léon Louis Lucien Prunol de Rosny（1837-1914年）（以後、ロニーと記す）が帝国図書館付属帝国東洋語専門学校²⁾（以後、東洋語学校と記す）の実践日本語コースの第一学年目で使用する文法書として著したものである。ロニーにとって、二冊目の日本語文法書である。Language vulgaireを直訳すれば「俗語」だが、日常の談話などで用いられることばづかいである口語を下に見て「俗語」と呼んでいたのである。1897年に『日本語文典初歩（口語）』の第2版が刊行されている。

フランスでは実践日本語コースの開設によって一般人にも開かれた口語日本語学習が始まり、それが今日に続いている。フランスにおける口語日本語学習の黎明期に初めて著された文法書を分析し、当時の日本語研究者が日本語文法をどのように解釈していたかを知ることは有意義であろう。初版の『日本語文典初歩（口語）』の全体像を明らかにすることを目的とし、本稿では、口語日本語学習を重視した解説を析出し、当著で対象にした日本語、構成、動詞分類法、フランス語を母語とする学習者を考慮した解説を中心に考察していく。日本語文法を科学的に解明・説明されているか、また学習者の実利に対応する文法書となっているかを明らかにする。

『日本語文典初歩（口語）』内のローマ字表記の日本語を提示する際、読みやすさを考慮し適宜平仮名、カタカナ、漢字を用い、アクセント記号と思われる種々の記号は省略する。

2. 東洋語学校日本語実践コースと19世紀半ばの日本語研究の動向

ロニーは1852年15歳で東洋語学校に入学し中国語を学びはじめるが、やがて日本語に興味を持つようになる。ロニー等日本語研究者たちは日本語研究のためランドレスによるフランス語訳（1825年）のロドリゲス著『日本文典初歩』（1620年）を使ったが、これは有効ではなかったと評している。また、ロニーはシーボルト著“Bibliotheca japonica”や“Sho-gen-ziko”等で文法や語彙を獲得しようとしたが、結局間違いを訂正する必要があり、簡潔な文法書を自分で刊行しようとした³⁾。それが、1856年刊行の“Introduction à l'étude de la Langue Japonaise”⁴⁾に実行されている。

1862年、第一回遣欧使節団の通詞に任命されたロニーは、使節団の団員であった福澤諭吉、栗本鋤雲、福地源一郎らと交流した。福澤の『西航記』⁵⁾にロニーの日本への強い探究心が記されている。また、後に栗本鋤雲がロニーの発話について語音が詰屈しており助詞を理解していないと証言している⁶⁾ことから、日本語での交流は十分にはできなかったと思われる。ロニーは彼らとの交流から文語と口語の違いを知り、口語日本語の学習なくしては交流は困難であることを痛感したのだろう。ロニーは口語日本語の学習の必要性を認識し、1863年に開設された東洋語学校実践日本語コースで使用する口語日本語の文法書『日本文典初歩（口語）』を著すことになる。当著の序章に「第一回遣欧使節団は日本語の様々な文体や特に会話体を特徴づける重要なヴァリエーションを理解させ」「口語の文法書は初心者にとって必要なものをほとんど含み、進展に役立つものになりうる」と記している。ロニーが1856年に刊行した初めての文法書については日本語の文献の本質や用途を学ぶためには必要なものだが、古文書の集まりであり、有用性のないものと述べている⁷⁾。

1863年に日本語の無料講座が始まった。ロニーは初代講師として日本語講座を担当し、1869年に教授に昇格、引き続き1907年まで勤務している。開講当時は無料講座であったが、1868年から正式な講座となる。当時の東洋語学校の日本語科は、フランス人の専任一人と日本人の非常勤講師一人から成り立っていたが、日本人講師は大使館員や留学生がなったためか交替が頻繁で欠員の年もあったようである。日本人講師は栗本貞次郎（1871-72年）、織田万（1898年）らの記録があるという⁸⁾。ロニーが担当した授業は、初めの数年は週二日の1時間から1時間半だが、1873年からは週三日2時間ずつ、1890年には週三日5時間ずつとなっている⁹⁾。

1873年9月1日から5日まで、パリにおいて、第一回国際東洋語学会議が開かれたが、この会議の主催者の一人はロニーである。日本研究の課題は日本語、文学、歴史、宗教、内政、外交、財政、民族、産業など多岐にわたっており、11の部会のうち8つが日本研究の部会である。会議の参加者は欧米人のみならず、26名の日本人会員のうち9名が参加している¹⁰⁾。

以上から当時の日本研究の隆盛、日本語学習過程が充実していく様子をうかがうことができる。

2. 1 東洋語学校実践日本語コース使用教科書

ロニーによる実践日本語コース開講講演が1863年5月5日になされた。講演の内容は、日本語講座が実利を提供できるという主張から始まる。この前年に来仏した遣欧使節団団員の発言から彼らが新しい国造りに情熱をもっていることを知り、ヨーロッパがこうした資質の国民から得る政治的、商業的利益が日ごとに増しているため、日本語の研究は非常に多種の意味で時宜を得るとともに、確かな将来性があると述べている¹¹⁾。続いて科学的な目的に移り、いまだ日本語研究が不完全であること、参考になるものが不足する中でも文献学は決定的に飛躍したこと、遣欧使節団の団員との交流から発音、アクセント、慣用句など口語の知識を得、口語から学習すべきことを述べている。また、日本語の系譜、日本における宗教、文学、自然科学・医学研究等の現状について述べ、学問の様々な分野において日本語は貴重な材料を提供すると主張している。ロニーは日本、日本語への学問的探究心だけでなく、時代の変化を把握し社会の要求を予測している。よって、実践コースは科学的目的と実利的目的があり、ロニーが著す日本語の教科書にも日本語を科学的に解明・説明し、かつ実利に対応できるような説明があることが予想できる。『日本語文典初歩（口語）』の序章で、「規則をできるだけ簡潔に、固有の言い回しの原則の説明によって特に明確に述べたい」と記している。

実践日本語コースは三か年のカリキュラムを組んでいる。第一学年は初級段階として口語を学び、第二学年は中級として読解を含む漢語を中心とする文語を、第三学年は上級として文学と書簡文、外交・商業文の書き方を学ぶ。下に示すのは各学年で使用する教科書の一覧である¹²⁾。これら全てをロニーが著そうと計画を立てたが、刊行が実現されなかったものもあるようだ¹³⁾。下に使用教科書一覧を示す。本稿の考察対象『日本語文典初歩（口語）』は第一学年の二番目に提示されている。

第一学年 初級（口語）

- I. Introduction au cours de japonais 「日本語学習入門」
- II. Eléments de la grammaire japonaise (langue vulgaire) 「日本語文典初歩（口語）」
- III. Guide de la conversation 「会話案内」
- IV. Dictionnaire japonais-français (langue vulgaire) 「口語日仏辞書」
- V. Dictionnaire français-japonais (langue vulgaire) 「口語仏日辞書」
- VI. Textes faciles et gradués en langue japonaise vulgaire 「学始日本安文」
- VII. Thèmes faciles et gradués pour l'étude de la langue japonaise accompagnés d'un vocabulaire français-japonais de tous les mots renfermés dans recueil 「和漢字洋譯」

第二学年 中級（漢語を中心とする文語）

- VIII. Introduction a l'étude de la littérature japonaise 「日本文学入門」
- IX. Grammaire sinico-japonais 「漢語文法」

- X. Vocabulaire sinico-japonais explique en français 「フランス語による説明付漢語語彙集」
- XI. Dictionnaire des signes idéographiques de la Chine, avec leur prononciation usité au Japon 「漢字辞典」
- XII. Recueil de textes japonais 「日本文集」

第三学年 上級（大衆文学、純文学、書簡文、外交・商業文）

- XIII. Manuel de la lecture japonaise, renferment les éléments figuratifs et phonétiques de l'écriture so-sho 「草書体による具象と音声の読解手引き」
- XIV. Grammaire japonaise 「日本文典」
- XV. Dictionnaire japonais-français (langue écrite et littérature) 「文語日仏辞書」
- XVI. Dictionnaire français-japonais (langue écrite et littérature) 「文語仏日辞書」
- XVII. Dictionnaire de l'écriture so-sho 「草書辞書」
- XVIII. Manuel du style épistolaire et du style diplomatique 「書簡文と外交文書の手引き」
- XIX. Chrestomathie japonaise 「名文集」
- XX. Anthologie japonaise 「名詩選」

3. 先行研究

ロニーの業績や著作に関して、いくつか研究がなされている。熊沢はロニーの日本語研究の業績をまとめ¹⁴⁾、ロニーの人となりを紹介している¹⁵⁾。松原はロニーの略伝を¹⁶⁾、関はロニーの東洋語学校初代日本語教授としてのロニーの業績をまとめている¹⁷⁾。白井はロニーの日本語研究発展における業績と日本の文明開化への功績を記している¹⁸⁾。飯田は実践日本語コースの第一学年目で使用する入門書 “Introduction à l'étude de la Langue Japonaise” の考察を行っている¹⁹⁾。また、飯田は、1897年刊行の『日本語文典初歩（口語）第2版』をロドリゲスの『日本文典初歩』と動詞の叙法を比較し、ロニーは動詞の活用を文節ユニットでまとめるなどの工夫があり、ロニーが日本語文法体系をよく理解し、それを教材として再編成していると述べている²⁰⁾。管見では、初版の『日本語文典初歩（口語）』を対象にした論考は見当たらない。

4. 『日本文典初歩（口語）』の考察

ことばには位相がある。ロニーが当著で対象とした日本語はどのような立場の人が使用することばだろうか。福澤諭吉は『旧藩情』²¹⁾の中で、江戸末期は武士階級の中にことばの相違はあっても、全国のことばとして江戸語と呼ばれる上層武士のことばが存在していたと記している²²⁾。ロニーが福澤等との交流を通して口語を直接的にも間接的にも教わったのであるか

ら、対象とした日本語は江戸語と考えられる。また、飛田は江戸末期から明治初期にかけて、ブラウン等の英米日本語学者が求めた日本語は教養ある上層武士の話すことばであり、欧米人は日本語を使用するときは自らを上層武士の階級に置いた話し方をしたと述べている²³⁾。『日本語文典初歩 (口語)』の49ページと163ページの脚注にブラウンの『口語日本語』“Colloquial Japanese”²⁴⁾を参考にした旨が記されていることからロニーが対象とした日本語は江戸語であると考えられる。なお、ロニーが数か所で方言の紹介をしていることから江戸語であることがわかる。また、女性の話し方を特別に付記している箇所があることから、ロニーが当著で対象とした日本語は主に男性が使用する江戸語であるといえよう。

4. 1 構成

『日本語文典初歩 (口語)』は全体で187ページである。まず、序章と学識者による評、文字の導入があり、本文が始まる。本文は三部に分かれている。第一部はDes différentes espèces de mots「様々な品詞」と名付けられており、135ページある。本文全体で150ページなので、第一部が大部分を占めていることになる。第一部は、名詞、動詞、状態のことばの三つに分けて述べられている。各解説に通し番号をつけ、それが269番まである。第二部はDe l'emploi de certains mots ou particules「語あるいは助詞の用法」と名付けられており、11ページの例文集である。第三部はDe la langue vulgaire, de la langue écrite et du style épistolaire「口語、文語、書簡体」と名付けられおり、6ページである。最後に、目次として3ページある。奥付の向かいのページと巻末に出版された実践コースで使用する教科書、出版予定の使用教科書が案内されている。

4. 2 文字と伊呂波

日本語には47の音節文字があり、母音の「あいうえお」を除いて、音節文字は子音と母音の組み合わせであると説明している。組み合わせの例として、「か」を「ka」と表記し、平仮名と片仮名の伊呂波を表にして提示している。平仮名は縦書き右列から、片仮名は縦書き左列から始まっており、それぞれの仮名の下にローマ字で読みを付けている。ローマ字による読みはフランス語話者にとって理解を容易にしたと思うが、「は」にはha、「ハ」にはfa、「ぬ」にはnu、「ヌ」にはnouのようにローマ字の綴りが異なる組み合わせが13あり、混乱が多いという印象を免れない。また、平仮名の「つ」「な」「も」の字体は他に比べて崩し書きの度合いが強い。また、「し」の字体は「𛄁」になっているが、次ページの語彙例の「うし」は「し」の字体である。仮名が漢字から派生したという説明はあるが、漢字については後日使用する教科書で学習するとして踏み込んでいない。ここでは、初級学習者が口語日本語の語形を理解するために必要な文字学習に絞り、学習者の負担を軽減するために文字学習の内容を選別していることがわかる。

語彙例では、濁点が欠落しているもの、ローマ字による表記の間違いがあるもの、またフラ

ンス語訳の不適切さなどが見られ、学習者に混乱を招いたと思われる。しかし概ね、文字の導入と共に字形と意味を同時に提示したことは評価すべきであろう。

4. 3 人称代名詞

品詞を名詞、動詞、辞の三つに分けている。ロニー自身がこの分類法は日本においても古い
が、江戸の学識者とのコミュニケーションにはこれが適切であると述べている。名詞を固有名
詞、普通名詞、代名詞に分け、代名詞を人称代名詞、所有代名詞、指示代名詞、再帰代名詞、
不定代名詞に分けている。

人称代名詞は、話し手と聞き手が依存する場面や文脈によって初めて指し示すものが特定で
きる直示である。よって、特に口語において、人称代名詞の使い分けは重要である。日本語は
フランス語に比べて人称代名詞のヴァリエーションが多いため、話し手、聞き手、第三者との
関係や親疎、それぞれの立場、場面などによって使い分けること、及び、使い分け基準を示す
必要がある。フランス語では、二人称の主格としてvousとtuの二つがあるが、前者は複数を
示すのみならず、単数であっても心理的に距離がある相手にはvousを使い、親しくなるとtu
を使う。二人称複数は親疎に関わらずvousである。よって、人称代名詞を相手との関係で使
い分けるという概念はフランス語話者にとって難しくないと思われる。しかし、日本語の人称
代名詞はヴァリエーションが多いため、その使い分け基準には簡潔な説明が求められるだろ
う。

ロニーは人称代名詞の話し手の立場をほとんど明示していないが、4で述べたように、当著
で対象とした日本語は上層武士のことだと推測できるため、話し手の立場を明示していない場
合は、上層武士階級が使用することだと解釈した。

まず、一番頻繁に使用するものとして、一人称は「わたくし」、二人称は「あなた・おまえ」、
三人称は「あのひと・あのおかた・かれ・あのおんな」を挙げている。

一人称については、丁寧語の「わたくし」を使用すると言っているが、聞き手は明示されて
いない。下位者に対しては、話し手の身分が高い場合は「拙者」を、親しい間柄であれば「わ
し」を、その他の場合は「おれ」を使うと述べている。話し手が帝である場合、「まろ・ちん」
であり、将軍や大名は「われ」を使用すると記している。ただし、聞き手が誰であるかは書か
れていない。一人称の例文として次のようなものがある。

「わたくしはキセルを持ちます。」

「わしをマゝおまえの成長を楽しむが、しかし悪い人に（あるいは、人と）交わることを案じ
ます。」

「拙者はただいま忙しくございますから、おてまえ様はしばらくお待ちなさい。」

「おれは別荘に行くから、むまに鞍を置け。」

二人称は、礼儀正しさ、敬意、親しさ、上下関係を基準にして使い分けているという。ロニ
ーの解釈に従って各二人称があてはまる使い分け基準に○をつけて表にした。

表1 二人称代名詞の使い分け基準

二人称	礼儀正しさ	敬意	親しさ	聞き手が 上位者	聞き手が 下位者
あなた・あなたさま	○				
おまえ			○		
おまえさま		○		○	
きみ・きみさま	○	○		○	
ごぜん・ごぜんさま		○		○	
われ・てまえ・そのほう・なんじ					○
うえさま	○				

「そのほう」は将軍が公的な場面で使用するという。「あなた・あなたさま」「おまえ」「うえさま」は相手が同等の場合も含めて相手との上下関係が明示されていない。二人称の例文として次のようなものがある。

「ごぜんはお馬場にいらっしゃいますか。」

「われは買い物に行け。」

「てまえは庭の掃除をしろ。」

「そのほうに少し用がある。」

三人称は、丁寧さ、親しさを主な基準として使い分けるといふ。より丁寧なことばは「あのかた」であり、丁寧なことばは「あのかた」、少し丁寧なことばは「彼」であり、「彼」を指し示す人物より上位者を指し示すときは「あれ」を使うと説明している。親しさが感じられる間柄では「こなた・このかた・このほう」を使うと説明している。三人称の例文として次のようなものがある。

「あのかたはわたくしに手紙をつかわしました。」

「あれはこの家にまえるママことを嫌がります。」

「こなたのご姓名はなにとおっさいママますか。」

人称代名詞を文語でも口語でも度々省略するとして、人称代名詞が入っているものと省略されたものを並べて例文を挙げている。次のような例文である。

「わたくしはみょうにちあなたの別荘にまえママりましょう。／みょうにちあなたの別荘にまえママりましょう。」

「あなたはわかりますか。／わかりますか。」

「わたくし」に格助詞を付加することで屈折をすると述べている。下に「わたくし」「あなた」「あのかた」「あのおんな」の屈折一覧を示す。省略は筆者によるものである。

WATAKOUSI «moi»

SINGULIER²⁵⁾

Nom. Watakoushi ou watakoushi-wa «moi».^{26), 27)}

Gén. Watakousi-no «de moi».

Dat. Watakousi-ni ou watakoushi-ye «à moi» ou «vers moi».

Acc. Watakousi-wo «moi».

Abl. Watakousi-yori ou watakousi-kara «de moi» ou «provenant de moi».

Inst. Watakousi-de «avec moi» ou «au moyen de moi».

PLURIEL²⁸⁾

Nom. Watakoushi-domo-wa «nous».

Gén. Watakousi-domo-no «de nous».

Dat. Watakousi-domo-ni ou watakousi-domo-ye «à nous» ou «vers nous».

Acc. Watakousi-domo-wo «nous».

Abl. Watakousi-domo-yori ou watakousi-domo-kara «de nous» ou «provenant de nous».

Inst. Watakousi-domo-de «avec nous» ou «au moyen de nous».

ANATA «vous»

SINGULIER

Nom. Anata-wa «toi».

Gén. Anata-no «de toi».

Dat. Anata-ni ou Anata-ye «à toi» ou «vers toi».

Acc. Anata-wo «toi».

Abl. Anata-yori ou Anata-kara «de toi» ou «provenant de toi».

Inst. Anata-de «avec toi» ou «au moyen de toi».

PLURIEL

Nom. Anata -gata- wa «vous».

Gén. Anata-gata -no «de vous».

Dat. Anata-gata -ni ou Anata gata -ye «à vous» ou «vers vous».

Acc. Anata-gata -wo «vous».

Abl. Anata-gata -yori ou Anata-gata -kara «de vous» ou «provenant de vous».

Inst. Anata-gata -de «avec vous» ou «au moyen de vous».

ANO-HITO «lui»

SINGULIER

Nom. Ano-hito-wa «lui».

(略)

PLURIEL

Nom. Ano-hito-bito-wa ou Ano-hito-tatsi-wa «eux».

(略)

ANO-ONNA «elle»

SINGULIER

Nom. Ano-onna-wa «elle».

(略)

PLURIEL

Nom. Ano-onna-gata-wa «elles».

(略)

人称代名詞の使い分けの説明には話し手と聞き手・第三者との関係が示されていないものがあり、また、場面の公私は例文によって学習者が推測するしかなく、説明不足を感じさせる。また、ロニーは文法説明の項目に多くの場合、フランス語訳付で例文を提示しているが、やや不自然なものが混在しており、学習者の理解を困難にさせたと思われる。上に「わたくし」「あなた」「あのひと」「あのおんな」の屈折一覧を示したが、この人称代名詞の選択は、多くの場面で使え、相手に対して礼を失することなく使用できる可能性が高いと思われ、実利的な目的はある程度果たされているように思われる。

4. 4 動詞

概要において、動詞には能動態、受動態、中立態があり、フランス語の再帰動詞と非人称動詞に対応する特別のグループがあると述べている。法には、直説法、条件法、命令法、譲歩法、不定法、ジェロンディフ、分詞、副詞的語句があるとしている。これらの中には法とは言えないジェロンディフ、分詞、副詞的語句が含まれるが、動詞の活用と共に語句を後続させて、一つの文型として導入するのが学習に有効であるとの判断があったと思われる。また、譲歩法はフランス語の動詞の法にはないのだが、ロドリゲスの『日本語小文典』で使われており、これに倣ったものと考えられる。フランス語の動詞の法には接続法があるが、これは取り入れられていない。時制は、現在、過去、未来の三時制としている。日本語には人称や数によ

る活用形の違いはないが、謙虚さや尊敬の気持ちを表す *particles* があり、それらが主語の人称を示す役目を持つと述べている。ロニーは謙虚さや尊敬の気持ちを表す *particles* と表現しているが、これは接頭辞や助動詞のことと推測される。ロニーが口語日本語学習を重視して、待遇表現の使い分けに言及しようとしていることがわかる。

動詞の概要を述べた後に、まず、①丁寧語の助動詞「ます」と、「ます」を付加した動詞の活用等を、次に、②目上から目下へ使用する動詞活用等を説明している。丁寧体の次に普通体を学習するという順序であり、今日の日本語教育での学習順序と同様である。日本語の文は、動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の三種類に分けられるが、まず、①において動詞述語文の丁寧体を作る助動詞「ます」を導入後、形容詞述語文、名詞述語文を作る助動詞「です」について説明している。

4. 4. 1 丁寧体

4. 4. 1. 1 助動詞「ます」と「ます」を伴った動詞

丁寧語を形成する成分である助動詞「ます（語幹：まし）」を提示し、これを動詞に単純に付加すると述べている。動詞に「ます」を付加して叙述する文体は丁寧体である。「ます」の活用一覧を下に示す。

Radical ²⁹⁾ : MASI

Affirmatif ³⁰⁾

Négatif ³¹⁾

INDICATIF ³²⁾

Présent ³³⁾ : masou.

masen ou masenou.

Passé ³⁴⁾ : masita.

masenanda.

Futur ³⁵⁾ : masho.

masou-mai.

CONDITIONEL ³⁶⁾

Présent : masou-naraba.

masenou-naraba.

Passé : masita-naraba.

masenanda-naraba.

Futur : masho-naraba.

masou-mai-naraba.

IMPERATIF ³⁷⁾

Voy. Les paradigme 104 et suiv. ³⁸⁾

CONCESSIF ³⁹⁾

Présent : masou-to-iye-domo

masenou-to-iye-domo

ou masou-kere-domo.	ou masenou-kere-domo.
Passé : masita-to-iye-domo	masenanda-to-iye-domo
ou masita-kere-domo.	ou masenanda-kere-domo.
Futur : masho-to-iye-domo	masou-mai-to-iye-domo
ou masho-kere-domo.	ou masou-mai-kere-domo.

INFINITIF ⁴⁰⁾

Présent : masou-koto.	masenou-koto.
Passé : masita-koto.	masenanda-koto.
Futur : masho-koto.	masou-mai-koto.

GERONDIF ⁴¹⁾

masite.	masenande.
---------	------------

語幹に付ける活用語尾の説明は文章化していない。

次に、動詞「見る（語幹：み）」を取り上げ、語幹「み」に助動詞「ます」を付加したものの活用一覧を提示している。動詞の概要説明では、日本語には人称や数で活用形の違いはないと記しているのだが、一覧には一人称単数、二人称単数、三人称単数、一人称複数、二人称複数、三人称複数の6つの活用形が主格と共に示され、フランス語訳も付いている。脚注に「フランス語話者の学習者に配慮する意図をもって、省略することなく全ての活用形を提示する」と記している。ここでは、直説法現在の活用形と、「ます」の命令形を用いた活用形を示す。

MIROU (radical : MI) «voir»

INDICATIF

Présent

Watakousi-wa mi-masou, je vois.
Anata-wa mi-masou, tu vois.
Ano-hito-wa mi-masou, il voit.
Watakousi-domo-wa mi-masou, nous voyons.
Anata-gata-wa mi-masou, vous voyez.
Ano-hito-tatsi-wa mi-masou, ils voient.

IMPERATIF

Mi-mase (unusité ⁴²⁾)	
O-mi-nasai	voyez

命令法に関しては、脚注にコミュニケーションでは漢語の表現「ごらんさい」を使っていると記し、実際に使用する口語表現に留意している。

「見ます」の活用説明の後、「見ます」の否定形、受け身肯定形、受け身否定形、形容詞的動詞肯定形、形容詞的動詞否定形、使役肯定形、使役否定形、希求動詞肯定形、希求動詞否定形、代名動詞、非人称動詞、複合動詞の導入が続く。

否定の活用形は語幹に否定を表す「ませぬ」を付加して形成すると説明し、直説法、命令法、条件法、譲歩法、不定法、ジェロンディフ、分詞の語形を一覧にして提示している。

受け身肯定形は能動動詞の語幹にある母音 e と i を are に変え、「ます」の付加によって形成するとしている。「見る」以外の動詞「書く」「読む」「切る」もフランス語訳付で語幹「書き」「読み」「切り」と受け身形「書かれ」「読まれ」「切られ」を並べて提示している。しかし、この説明では「見る」(語幹は「mi : み」)の受け身形は「まれ」となってしまうが、「見る」の受け身肯定形の活用一覧には正しい語形の「見られ」が示されている。受け身否定形は能動否定形の語幹にある母音 e と i を are に変えることによって形成すると説明している。

ロニーの言う形容詞的動詞とは漢語に「する」を付加した動詞のことである。「愛する」を取り上げ、「ます」を付加したものの肯定形、否定形の活用一覧を提示している。

使役肯定形は「せ」で終わり、それを活用させたものに助動詞「ます」を付加すると説明している。やや雑駁な説明であるが、「書かせる」をフランス語訳付で活用一覧を提示することで説明を省略したのであろうか。あるいは授業において詳細を説明したのであろうか。使役否定形は使役肯定形の「ます」を「ませぬ」に変えるように活用させればよいと説明している。使役否定形の作り方は、受け身否定形の作り方とアプローチが異なりシンプルである。学習者にとって、活用のアプローチはシンプルで、同時に種類が少ないほうが負担が少ない。よって、使役否定形の作り方に統一されていれば、より学習効率を上げることができたと思われる。

ロニーが言うところの希求動詞とは希望や願望を表すもので語幹に「たい、とう」を接続させたものである。例えば「飲みたい」がそれにあたる。それらの活用一覧を提示した後で、否定形の作り方を示している。

代名動詞は能動動詞「殺します」に対して「自害します」を例として挙げているように、フランス語の再帰動詞に対応する動詞を代名動詞と名付けたようである。

非人称動詞は天候を表す動詞 *pleuvoir* (雨が降る) が日本語にはないため、天候を表す表現を例示している。フランス語の動詞分類法を取り入れた説明は、理解の負担を軽減し、より速やかな産出を促進したと考えられる。

複合動詞の語構成を簡単に説明したうえで、活用は後項の動詞が活用法則の制限を受けると説明している。

フランス語の動詞の種類分けを基準にして日本語の動詞を分け、学習者の理解の負担を軽減している。しかし、各態の語形形成手順の説明に複雑なアプローチが混在し、説明の過度の簡

略化があることは、学習者にとって理解困難であったと思われるが、十分な練習を積み重ねれば理解定着は可能だったと思われる。

4. 4. 1. 2 敬語 - 「ござる」

「全ての日本人は会話、書きことば、手紙文の中で敬語を頻繁に使い、誰が話すか、誰に話すか、誰について話すかによって敬語は変化する」「敬語の使用は日本人の習慣に浸透しており、敬語の使用を無視すれば粗野で育ちが悪い人とみなされる」と述べ、敬語使用の重要性を強調している。

尊敬の気持ちを表すために、話しかける相手に関係する動詞に「お」「ご」を先行させる方法、助動詞「れる（られる）」を付加する方法、「ござる・ございます」を付加する方法があると述べている。助動詞「れる（られる）」の説明において、尊敬の意を示すために受け身形を使用すると理由付けをしているが、受け身形と尊敬形が同じ語形のためか、勘違いをしているようである。また、示された例文には受け身形ではなく使役受け身形が使用されており、学習者の理解を混乱させるものになっている。

下に「ござる・ございます」の活用一覧の一部を示す。「ござる・ございます」を使った例文は示されていないが、第二部で16の例文を挙げている。

GOZAROU «être»

INDICATIF

Présent

Gozarou ou gozai-masou, je suis, etc.

Passé

Gozatta ou gozai masita, j'étais.

Futur

Gozaro ou gozari-masho, je serai.

直接法において、「現在」「過去」は「ございます」「ございました」、「未来」は「ござりましょう」となっている。「未来」ではイ音便が見られないが、条件法以降すべての法と時制でイ音便化した「ござい」が示され、第二部の例文でもイ音便化した形が使用されている。脚注に江戸語の「ござり」が「ござい」に、また「ござりた」が「ござった」に変わったものと説明している。例文には「この本は、なかなか読むに難しうございます。」「あなたが好く人はインギリスの人でございますか。」などがある。

飛田はブラウンの2冊の著作、“Colloquial Japanese”（1863年）と“Prendergast's Mastery System”（1875年）の中に表れる「ござる」等の語形を比較し、江戸時代末期から明治時代にかけて古形の「ござり」から新形の「ござい」への交替が見られると述べている⁴³⁾。ロニー

は1863年以降来仏する日本人の発話から新形の「ござい」への交替を知り、学習者の実利に配慮し、敬語使用の説明に反映させたものと思われる。

4. 4. 1. 3 敬語－授受動詞

授受動詞「あげる・くれる・もらう」は直示である。ロニーはフランス語の *donner*（与える）に対応する「あげます」「くださいます」「やります」を取り上げている。一人称では「あげます」を、二人称では「くださいます」を、三人称では「やります」を使用するが、特に尊敬の念を表したいとき、（話し手が）下位者は「あげます」を使うとしている。なお、説明文の中で書き間違いと思われるものがあったので例文から類推した。「あげます・くださいます・やります」と共起する動作主の説明と例文を示している。

「私はあなたに本をあげましょう。」

「あなたは私に刀をくださいました。」

「あの人は子供に弓をやりました。」

「あなたは帝に旗をあげましょう。」

「あの人は大名にこの新聞紙をあげましょう。」

下は「あげます・くださいます・やります」の活用一覧の一部である。

Conjugaison du verbe DONNER :

INDICATIF

Présent.

Watakousi-wa age-masou, je donne.

Anata-wa koudsai-masou, tu donnes.

Ano-hito-wa yari-masou, il donne.

(略)

Passé.

(略)

Futur.

(略)

IMPERARIF

Koudasai-masi, donne, donnez.

(略)

GERONDIF.

Age-masite, en donnant.

Koudasai-masite, en donnant.

Yarimasite, en donnant.

PARTICIPE.

Présent.

Age-masou..., qui se donne, que l'on donne.

Koudasai-masou..., qui se donne, que l'on donne.

Yari-masou..., qui se donne, que l'on donne.

Passé.

(略)

Futur

(略)

GERONDIFとPARTICIPEの「やります」の活用形は、このページ (p.115) では「与えます」の活用形が提示されている。訂正のページにおいて「やります」の活用形に直すように指示している。この訂正によって、donnerは「与えます」に対応するが、「あげます」「くださいます」「やります」を用いることで与え手と受け手の関係を表現できることをロニーが理解しており、それを学習項目に取り上げていることがわかるのである。

フランス語のdonnerという一つの動詞が日本語の「あげる・くれる・やる」に対応するため、フランス語母語話者にとって「あげる・くれる・やる」の使い分けの学習は必須である。ロニーの使い分けの説明は不完全であるが、例文では適切に使い分けられており学習に有効であったと思われる。

4. 4. 2 普通体

上位者が下位者に向かって話すときは、「ます」を付加しない形である普通体を使い、動詞そのものの活用によって態、法、時制を表すと説明している。

4. 4. 2. 1 動詞分類

動詞の活用パターンを理解し適切な形に活用することは、ことばの理解、産出において不可欠なものである。よって、活用法則の説明にはより正確さと簡潔さが求められる。ロニーは動詞活用の法則から動詞を三つに分類し、第三活用動詞から説明を始め、第一活用動詞、第二活用動詞の順で進めている。

第三活用動詞は、語幹が母音 i で終わり、直説法現在形が「る・つ・む・く・す」の音節で終わるか、または、二重母音となって「う」の音節で終わるものとしている。例として「作る・立つ・好む・言う・書く・隠す・疑う・通う・振るう」を挙げている。

第一活用動詞は、語幹が母音 e で終わるもので、語幹の音節が「け・げ・へ（え）・べ・て・で・せ・ぜ・め・れ・え」で終わるものとしている。「寝る・求める」を例として用い、直説法、条件法、命令法、譲歩法、不定法、ジェロンディフ、分詞の作り方を説明し、「とどめる」の活用一覧を提示している。フランス語訳付である。命令形を「とどめ」としているが、これは不自然である。条件法現在の作り方は語幹末尾の e を eraba に変えて作ると説明しているので、一人称の「おれは とどめれば」は説明通りであるが、表内の二人称と三人称の「とどまらば」は説明と合致していない。

第二活用動詞は、語幹が母音 i で終わるもので、語幹の音節が「き・ち・し・み・に・り・ぎ・び」で終わるものとしている。29の動詞の語幹と直説法現在形・過去形を挙げている。29の動詞は「遊ぶ・あおぐ・あゆむ・えらむ（選ぶ）・書く・掻く・切る・こぐ・汲む・来る・待つ・結ぶ・馴染む・にじむ・飲む・抜く・拝む・泳ぐ・叫ぶ・死ぬ・そねむ・進む・立つ・飛ぶ・散る・止む・呼ぶ・読む・喜ぶ」である。

説明の中で取り上げられた動詞から三つ取り上げ、下に活用一覧表を作成した。第一活用動詞は「求める」、第二活用動詞は「読む」、第三活用動詞は「払う」を取り上げた。

表2 ロニーによる動詞三分類の活用形

	第一活用動詞求める語幹：motome	第二活用動詞読む語幹：yomi	第三活用動詞払う語幹：harai
INDIC.			
Présent	motomerou	yomou	haraou
Passé	motometa	yonda	haratta
Futur	motomerou-daro	yomo ou yomou-daro	haro ^マ
IMP.	motome-yo ou motome-ro	yome	harae ou harae-yo ou harae-ro ^マ
CONDIT.			
Présent	motomereba	yomaba	haravaba
Passé	motometaraba	yonda-naraba	haratta-naraba
Futur	motomerou-daro-naraba	yomo-naraba	haro-naraba
CONC.			
Présent	motomerou-to-iye-domo	yomou-to-iye-domo	haraou-to-iye-domo
Passé	motometa-to-iye-domo	yonda-to-iye-domo	haratta-to-iye-domo
Futur	motomerou-daro-to-iye-domo	yomo-to-iye-domo	haraou-daro-to-iye-domo
INF.			
Présent	motomerou-koto	yomou-koto	haraou-koto
Passé	motometa-koto	yonda-koto	haratta-koto
Futur	motomerou-daro-koto	yomo-koto	haraou-daro-koto

GER. PART.	motomete	yomite	haratte
Présent	motomerou- (nom) ⁴⁴⁾	yomou- (nom)	haraou- (nom)
Passé	motometa- (nom)	yonda- (nom)	haratta- (nom)
Futur	motomerou-daro- (nom)	yomo- (nom) ou yomou-daro- (nom)	haraou-daro- (nom)

第三活用動詞「払う」の活用の中で、未来形が「はろう」、命令形に「はらえよ・はらえろ」という不自然な形が入っている。本文中の第三活用動詞の他の例である「失う」「言う」では、未来形が「失おう」「言おう」となっており、これは自然である。

今日の日本語教育でも動詞を活用によって三つに分類しており、Ⅰグループ動詞（以後、GⅠと記す）は五段活用動詞、Ⅱグループ動詞（以後、GⅡと記す）は上一段・下一段活用動詞、Ⅲグループ動詞（以後、GⅢと記す）はカ・サ行変格活用動詞である。ロニーの第一活用動詞には、上一段活用動詞が含まれていないが、GⅡに近いものである。第二活用動詞はGⅠに近いものになっている。ただし、語幹がワ行で終わるものは第三活用動詞に分類され、カ行変格活用動詞「来る」を加えている。収集された動詞は、概ねGⅠなのだが、語幹の末尾が母音 i であり、GⅠは語幹の末尾が子音であるという法則とは異なる解釈をしている。第三活用動詞は、GⅠの一部のように見受けられるが、語幹が母音 i で終わり直説法現在が「る・つ・む・く・す」の音節で終わる動詞が第二活用動詞にも含まれるという矛盾がある。「取る」「立つ」「済む」「書く」「話す」等の動詞はどちらにも属することになる。実際、本文中に例示された動詞「書く」と「立つ」は第三活用動詞の説明の中にも、第二活用動詞の説明の中にも使用されている。サ行変格活用の「する」はどの分類の例示にも表れていないが、ロニーの説明に準じれば、第二活用動詞にも第三活用動詞にも分類されることになる。このような矛盾は学習者の理解を混乱させるものであったに違いない。

では、ロニーの動詞分類は何を参考にしてなされたのであろうか。ロニーの『日本語文典初歩（口語）』が出版された1873年は馬場辰猪がロンドンで『日本文典初歩』⁴⁵⁾を、また、アーネスト・サトウが横浜で『会話編』⁴⁶⁾を刊行した年である。馬場による動詞分類は今日の日本語教育における動詞分類と同様のものである。「行く」の語幹をikとし、語幹の末尾が子音で終わっていると分析したことは、当時としては斬新であり、かつ、日本語の音節を正確に理解して活用形の説明に取り入れていることが認められる。また、サトウの分類方法も今日の日本語教育の動詞三分類と同様である。金沢は、サトウはアストンが刊行した1869年の『口語日本語小文典』⁴⁷⁾の動詞分析の影響を大きく受けていると述べている⁴⁸⁾。アストンは規則活用動詞としてⅠ・Ⅱグループ動詞を、不規則活用動詞として「する」「来る」「死ぬ」を分類しており、今日の三分類がほぼ完成されている。

時間的に見れば、ロニーがアストンの1869年刊行『口語日本語小文典』を参考にすること

は十分に可能だが、アストンの分類との共通点は見出しにくい。ロニーは、脚注にブラウンの1863年刊行『口語日本語』⁴⁹⁾を参考にしたと記しているため、ブラウンの動詞分類を参考にした可能性が考えられるが、いかがであろうか。ブラウンの『口語日本語』における動詞分類は、規則動詞と不規則動詞の二種類で、規則動詞は上一段・下一段活用動詞、不規則動詞は五段活用動詞である。いずれも語幹はiかeの母音で終わるとしている。語幹のとらえ方は全ての語幹を母音で終わるという旧来のものだが、分類は馬場やサトウのものと同様である。よって、ロニーはこの分類方法を取り入れていないことがわかる。却って、時代を遡った1620年刊行のロドリゲスの『日本語小文典』⁵⁰⁾に共通点が見られる。ロドリゲスの動詞三分類は、①上一段（上二段）・下一段（下二段）活用動詞、カ行変格活用動詞、サ行変格活用動詞 ②五段（四段）活用動詞からワ行動詞を除いたもの ③五段（四段）活用動詞のワ行動詞である。ロニーは①の下一段（下二段）活用動詞を第一活用動詞とし、②にカ行変格活用動詞を加えたものを第二活用動詞に、③に五段活用動詞の一部を加えたものにしており、ロドリゲスの分類を基にしていると考えられるが、ロニーの動詞分類法はロドリゲスの動詞分類法を進化させたものとは認めにくい。

ロニーは当著において五十音図を紹介していないが、1863年刊行の『カタカナ伊呂波誦習』⁵¹⁾において五十音図に近いものを紹介している。同じ母音で終わる仮名、同じ子音で始まる仮名、濁音・半濁音・拗音をローマ字と片仮名で表記している。「なねにのぬ」等を縦に書き連ね、途中に適宜音節を挿入したものである。五段動詞活用の規則性は五十音図と照らし合わすと理解が容易なのだが、ロニー自身が五段活用の規則性を整理し終えていなかったか、もしくは、五十音の体系を認識していなかった可能性が考えられる。

4. 5 間投詞

日本語の会話には間投詞が多くみられる。ロニーは親しい間柄での間投詞のヴァリエーションを挙げている。「へ」「へい」「ね」「ああ」「いい」「さてさて」である。「へ」「へい」は話手の論に追従していることを示すために相手の発話の間で度々繰り返されると述べている。また、文節の終わりに「ね」が頻繁に用いられると述べている。フランス語を母語とする学習者に対して大切な指示である。在仏の日本人同士の会話や日本人との会話から間投詞が自然な会話を形成するために必要であることを学び、学習項目に取り上げたと思われる。

4. 6 例文提示と文体提示

第二部では「語と助詞の用法」と称して、168の口語文あるいは句を挙げている。フランス語訳付である。日本語の文に不自然さや間違いもあるが、副助詞「は」と格助詞「が」の使い分けは全く間違いがない。また、管見ではフランス語の訳と日本語文にずれを感じるものもあるが、学習者は文作成、助詞の使い方練習、動詞の活用練習、読みの練習等に有効であり、実利的目的を果たしていると言える。

第三部では、同じ内容を口語、文語、書簡体を紹介している。最初にローマ字表記（活版）の口語とフランス語訳、次に手書きの文語が、最後に手書きの書簡体が提示され、視覚的に口語、文語、書簡体の違いが把握できるものになっている。内容は日本へ実際赴くことの重要性、日本語を知らなければ日本人と付き合うこともできないし、商売もできず、国の様子を知ることができないというものである。ロニー自身の日本への強い興味、来日への願望、学習者への忠告が感じられる。

5. おわりに

ロニーは口語の文法書であることを念頭に置き、文字学習では漢字にはほとんど触れず、また文法説明においては日本語の例文のほとんどをローマ字表記で書くなど、文字学習の負担を軽減して教授しようとしている。文体においては、学習者が使用するにふさわしい丁寧体の学習から始め学習順序に配慮している。敬語の特定形「ござる」等、また与え手と受け手によって使い分ける人称代名詞や授受動詞、会話を促進するために必要な種々の間投詞を説明し、本文のある部分においては多量の例示を示す等、学習者の実利に対応することを試みた文法書となっている。一冊目の文法書“Introduction à l'étude de la Langue Japonaise”は文献読解を目標に著されたが、『日本語文典初歩（口語）』は口語の学習を重視した実践的な文法書となっている。1897年に第2版が刊行されたことからわかるように『日本語文典初歩（口語）』は数十年使用されている。

しかし、人称代名詞の使い分け基準の説明不足や不明瞭さ、動詞分類に不完全さがあり、活用形にも一部不自然さがある。また、日本語のローマ字表記の乱れだけでなく、カンマやピリオドの打ち方が統一されておらず、校正に十分な時間がなかったことも感じる。『日本語文典初歩（口語）』が刊行された1873年は東洋会議が開催され、多数の教科書執筆に着手していたために、口語日本語文法を体系的に整理し緻密な文法書を完成させる時間が不足していたのだろうか。学習者の実利に対応しようと試みてはいるが、口語日本語の文法を科学的に十分に解明・説明できたものとは言い難い。

1867年に徳川幕府がロニーを雇う計画がありながら、老母を抱えていることを理由に受諾していない⁵²⁾。一方、1863年以降、来仏する日本人が増え、名簿に載っている1871年の日本人フランス留学生は58人に上っている。ロニーが日本人と接する機会は格段に増えたとはいえ、来日の経験をするとなしに、乏しい日本語の資料と限られた日本人との交流の中で日本語の学習・研究を行うことには限界があったのかもしれない。1898年にロニーの許で講師を務めた織田万はロニーの教科書を非常に変わっていて古いものであり、ロニーの日本語知識についても厳しく批判している⁵³⁾。

しかしながら、ロニーの日本語や日本への探究心が、実践コース開設、国際東洋会議の開催、日本語の教科書辞書の出版を推し進めた。ロニーの教え子であるドトルメール、モリス・

クーラン、ミシェル・ルヴォンは来日して日本語を習得し、ロニーは後進の者に追い越されることになったが⁵⁴⁾、ロニーの許での日本語学習がそれらの基礎になっているのである。『日本語文典初歩（口語）』は問題点のある文法書だが、フランス語母語話者の実践的な日本語学習の一助になったと言えるだろう。同時にフランスにおける口語日本語学習の基礎を作り進歩させたことは間違いない。今後、更に『日本語文典初歩（口語）』の考察を深め、全体像を明らかにしていきたい。ロニーは実践コースで使用する教科書を多数著している。それらの考察、またロニー以降のフランスにおける日本語学習書の調査も今後の課題としたい。

謝辞 本稿の執筆にあたり、便宜供与をしてくださった金沢朱美先生、目白大学新宿図書館の中浦陽平氏、国際交流基金JFICライブラリースタッフの方々に御礼申し上げます。

【注】

- 1) Léon de Rosny “Eléments de la Grammaire Japonaise (Language vulgaire)” 1873, Paris France.
- 2) 現在の国立東洋文明学院 Institute National des Langues et Civilisations Orientales (INALCO) の前身である。http://www.inalco.fr/ 2014年7月30日採取。
- 3) 白井智子「レオン・ド・ロニーの目から見た日仏交流とフランスにおける日本語学の始まり」『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』35号、1996年 pp.280-281。
- 4) Léon de Rosny “Introduction à l'étude de la Langue Japonaise” 1856, Paris France.
- 5) 福澤諭吉「西航記」1862年、富田正文 編者代表『福澤諭吉選集 第1巻』岩波書店、1980年。
- 6) 松原秀一「レオン・ド・ロニ略伝」『近代日本研究』慶應義塾福澤研究センター、1986年、p.20。
- 7) Léon de Rosny 1 前掲 pp V-VII.
- 8) 松原 前掲。
- 9) 西堀昭「フランスにおける日本仏学資料 3. レオン・ドゥ・ロニと東洋語学校における時間表」『仏蘭西学研究』7号、1976年。
- 10) 飯田史也『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』風間書房、1998年。会員の中には Tatsui Babaの名前も見られるが、彼は参加していない。馬場辰猪は、ロニーが『日本語文典初歩（口語）』を出版した1873年にイギリスにおいて『日本文典初歩』を出版している。
- 11) 森川甫「ロニの東洋語学校日本語講座開講講演（1863年）」『関西学院大学社会学部紀要』第47号、1983年。
- 12) 熊沢精次「フランスの日本語教育史—レオン・ド・ロニーを中心に—」『日本語教育/日本語教育学会〔編〕』60号、1986年、pp.130-131。
- 13) 白井 前掲 p.289。
- 14) 熊沢 前掲。
- 15) 熊沢精次「第一章 エピソードでつづる日本語国際交流史 ホフマンとロニー」関正昭・平高史 也編『日本語教育史』アルク、1997年。
- 16) 松原 前掲。
- 17) 関正昭『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク、1997年。
- 18) 白井 前掲。
- 19) 飯田史也「19世紀中期のフランスにおける日本語テキストの考察—レオン・ド・ロニの “Introduction à l'étude de la Langue Japonaise ; seconde édition”—」『福岡教育大学紀要』第48号、第4分冊、1999年。
- 20) 飯田10 前掲 pp. 29-37。

- 21) 福澤諭吉「旧藩情」1878年、『福澤諭吉全集 第7巻』岩波書店、1959年。
- 22) 飛田良文『東京語成立史の研究』東京堂出版、1992年。
- 23) 飛田 前掲 p.620。
- 24) S.R. Brown “Colloquial Japanese, or conversational sentences and dialogues in English and Japanese, together with an English-Japanese index to serve as a vocabulary, and an introduction on the grammatical structure of the language” 1863、李長波編集・解説『近代日本語教科書選集第1巻』クロスカルチャー出版、2010～2011年。
- 25) SINGULIER：単数。
- 26) Nom.：主格、Gen.：所有格、Dat.：与格、Acc.：対格、Abl.：奪格、Inst.：道具。
- 27) ou：「あるいは」の意。英語のorにあたる。
- 28) PLURIEL：複数。
- 29) Radical：語根。
- 30) Affirmatif：肯定。
- 31) Négatif：否定。
- 32) INDICATIF：直説法。
- 33) Présent：現在。
- 34) Passé：過去。
- 35) Futur：未来。
- 36) CONDITIONEL：条件法。
- 37) IMPERATIF：命令法。
- 38) 「一覧104を見よ」の意。
- 39) CONCESSIONIF：譲歩法。
- 40) INFINITIF：不定法。
- 41) GERONDIF：ジェロンディフ。
- 42) Unusité：使わない。
- 43) 飛田 前掲 p.632。
- 44) nom：名詞。
- 45) Tatui Baba “An elementary grammar of the Japanese language: with easy progressive exercises” 1873, London England, 李長波編集・解説『近代日本語教科書選集第6巻』クロスカルチャー出版、2010～2011年。
- 46) Ernest Satow “Kuaiwa hen, twenty-five exercises in the Yedo colloquial, for the use of students, with notes” Yokohama 1873, 李長波編集・解説『近代日本語教科書選集第6巻』クロスカルチャー出版、2010～2011年。
- 47) 渡邊修「資料紹介 アストン『日本語口語文典』—初版影印—解説」『大妻女子大学文学部紀要』1982年。http://ci.nii.ac.jp/els/110000128224.pdf?id=ART0000472137&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1407144844&cp 2014年8月4日採取。
- 48) 金沢朱美「馬場辰猪 “An elementary Grammar of the Japanese Language” —動詞分類の特徴ならびに出現背景についての考察を中心に」『日中学術研究誌』日中学術交流振興学会、2008年。
- 49) S.R. Brown 前掲。
- 50) 池上岑夫『ロドリゲス 日本語小文典 (上)』岩波書店、1993年。
- 51) Léon de Rosny “Exercices de lecture japonaise à l'usage” 1863. Paris France. http://reader.digitale-sammlungen.de/de/fs1/object/display/bsb10572389_00005.html 2014年8月26日採取。
- 52) 松原 前掲 p. 55。
- 53) 松原 前掲 p. 51。
- 54) 松原 前掲 p. 54。